

# 相互やりとりに立ち現れる分人としての“そのひとらしさ” —撮り、描き、対話して綴る—

## Exploring “What He/She Is” through Social Interaction

中川 晃輔<sup>\*1</sup>  
Kosuke Nakagawa

諏訪 正樹<sup>\*1</sup>  
Masaki Suwa

坂井田 瑠衣<sup>\*2</sup>  
Rui Sakaida

<sup>\*1</sup> 慶應義塾大学環境情報学部  
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

<sup>\*2</sup> 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科  
Graduate School of Media and Governance, Keio University

In this paper, we introduce a method of exploring “what he/she is” through social interaction between an interviewer and an interviewee. Taking pictures, drawing sketches of his/hers, describing various notices of what he/she is, and talking with him/her enables summarized descriptions of “what he/she is”, each of which is his/her “dividual”.

### 1. はじめに

#### 1.1 “そのひとらしさ”とは

“そのひとらしさ”とは何であろうか。我々は日常的にこの言葉を用いるが、それが何を指し示すのかについて、実は非常に暗黙的である。にもかかわらず、「自分らしさを大切に」というような文句はごく一般的に広まっている。筆者らは、このように曖昧に捉えている“そのひとらしさ”を二人称視点から探究するための方法を考案した。自分と相対する人を主体とした時、彼(彼女)の“そのひとらしさ”を感じている「わたし」は二人称視点に立っていると言えるため、このような表現を用いている。

本稿の手法の根幹をなしているのは、自らの体感や知覚、意識などを言語化するということからだメタ認知[諏訪 10]である。ただ、暗黙的な“そのひとらしさ”をいきなりことば化することは困難であるだけでなく、無理にことば化しようとするれば、かえってそのエッセンスを失いかねない。そこで、写真撮影やスケッチなどのことば化以外の外的表象化を組み合わせたことが重要になってくる。本稿は、“そのひとらしさ”とは何であるかを問うとともに、その探究方法論を提案するものである。

#### 1.2 分人としての“そのひとらしさ”

作家の平野啓一郎は、一人の人間をもうそれ以上分割できない「個人 in-dividual」としてではなく、あらゆる対人関係や環境との接点で立ち現れる複数の「分人 dividual」の統合された存在として捉える考え方を提唱している[平野 12]。筆者らは、“そのひとらしさ”にも同じことが言えると考える。たとえある同一の人物を対象にしても、誰にとつての、どんな状況における“そのひとらしさ”なのかによって、それは全く異なるはずである。

Aさんの“Aさんらしさ”を例に考えてみると、同じテニス部で精力的に練習に取り組むAさんの様子を目にしているBさんと、帰り道に一人で歩いているAさんを度々目撃するCさんとは、感じている“Aさんらしさ”は異なるであろう。また、Aさんが1人で歩いているところをBさんとCさんが同時に見かけたとしても、その前後の文脈によっても感じられる“Aさんらしさ”はその都度異なる。“そのひとらしさ”は臨機応変に形を変えて立ち現れるものであることを、前提として理解しておく必要がある。

### 2. 研究アプローチ: 二人称視点での探究

分人の考えに基づくならば、“そのひとらしさ”はその人にもとから備わっているものではなく、自分と対象人物との相互やりとりの中に立ち現れてくるものであることがわかる。よって、客観的な観測方法のみで“そのひとらしさ”を探究することはできず、『わたし』は“そのひとらしさ”をどのように感じているのかという、知覚や意識、体感などの主観的なデータが必要である。

従来の自然科学がとってきた客観的観測方法、すなわち三人称視点では捉えきれないデータを扱うため、一人称視点や二人称視点での研究が必要である[諏訪 13]。例えば、将棋の熟達者を例題とし、二人称視点でのスキルの解明が試みられている[伊藤 13]。本研究の目的は、対象者と深いかかわりのある研究者が、二人称視点で、対象者の“そのひとらしさ”を探究することである。

二人称視点でのかかわりを重要視する手法として、アクティブインタビューがある[Holstein 95]。インタビューという行為を、聞き手が話し手の持っている知をただ引き出す行為ではなく、相互のコミュニケーションであると捉え、それが活性化した結果として新たな知の側面を見出すことができるとする考え方である。また Goffman によれば、相互行為の話し手は、伝達しようとする以上の情報を聞き手に対して表出しており、その意味で、聞き手は話し手が話すこと以上の情報を取得できる[Goffman 59]。すなわち、二人称視点でのやりとりによって、当人が言語化できること以上の“そのひとらしさ”を導くことができると考えられる。

### 3. 方法および実践

本章では、“そのひとらしさ”の探究方法論の具体的な実践内容について解説する。実践は8つの段階に分かれているため、それらを1つずつ説明するとともに、各段階において得られるデータも同時に示す。同様の実践を第一著者が5名の被験者に実施したが、ここではそのうちの一人(F)のデータを紹介する。

#### 3.1 A: 写真を撮り「からだの記憶」の手がかりを得る

まず、対象者の写真を撮影する。この時のポイントは、「からだの記憶」の手がかりを得ることである。「からだの記憶」とは、その人と相対した自分が、その時その瞬間にからだで感じている“そのひとらしさ”のことを表す。“そのひとらしさ”は、抽象的な言葉では到底説明しきれない、状況依存的、個別具体的な情報を伴うものだとして筆者らは考えている。“そのひとらしさ”を探究して

いけば、その人はどんな時に「やさしい」か、どんなふうに「怖い」か、というような詳細な問いが立つはずである。詳細な問いが立ち、それに自ら答えようとすると、抽象的な言葉だけでは説明できなくなり、個別具体的に語らざるをえなくなる。このことが、“そのひとらしさ”の探究プロセスには欠かせない。

写真を撮影するその瞬間には言語化を必要としないが、「写真」という実体が生成されることで、その時その場のことをかなり鮮明に思い返すことができる。これぞまさに、写真を撮ることで「からだの記憶」の手がかりを得るという言葉の意味である。しかも、単に視覚的情報のみを思い返すというだけにとどまらず、その前後の時間経過や、視覚以外の触覚や聴覚などの感覚までも喚起することが、後の実践によって明らかになった。この点については、3.3以降で詳しく説明する。

上述の事項を踏まえると、

A-1:強い意図を持って写真を撮ることはしない方がよい。あくまでも、3.3以降の実践での外的表象化や問いの連鎖を促すための手がかりを得るのだという意識を持っておく。

A-2:直感的に、とにかく手がかりとしての写真を残す。感覚としては、瞬きであるかのようにシャッターを切る。

A-3:撮影枚数は特に問わないが、およそ100枚前後あると望ましい。最低でもひと月以上にわたり、4回は異なるシチュエーションで撮影した方がよい。シチュエーションとは、必ずしも場所だけのことを指さず、同じ場所であっても違ったことに取り組んでいる場合などは、別のシチュエーションとして捉える。“そのひとらしさ”は様々な状況に対応して現れるとすると、ひと月以上、4回以上異なるシチュエーションでというのは、環境変化として必要最低限の数であると感じている。

### 3.2 B:「からだの記憶」を頼りに写真を絞り込む

撮影した写真を絞り込む。この際も写真を撮影する時と同様、「からだの記憶」が重要である。ポイントは以下の通りである。

B-1:この段階においても、極力“そのひとらしさ”を言語化することは避けて直感的に選ぶことが重要だと考えている。写真を撮影しただけでは、外的表象化の手がかりを得たに過ぎず、言語化するにはまだ隔りがあるためである。

B-2:じっくりと眺めて考えるのではなく、並べた写真を次々にスライドし、1枚あたり長くても3秒ほどのペースで見るとよい。

B-3:明確な基準を設けずに選択するため、個人差は生じるが、約100枚の写真から5~6枚、多くとも10枚程度に絞る。

### 3.3 C:スケッチすることで“そのひとらしさ”を外に出す

絞り込んだ数枚の写真を手がかりに、いよいよ暗黙的であった“そのひとらしさ”の外的表象化を行う。その手段として、本研究ではまずスケッチを行う。実践環境は図1の通りである。

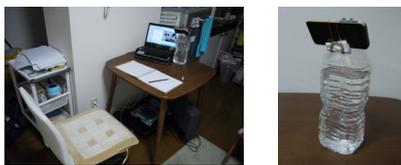


図1: スケッチ実践環境(左)とスケッチ撮影器具(右)

ここからは、ことば化を取り入れるため、非常に重要な局面である。そのため細かな実践環境の整備が必要となる。スケッチにおける留意点を以下にまとめた。図2は実際のスケッチである。

C-1:1人であるべく静かに写真と向き合える環境で行う。

C-2:できるだけ自由に「からだの記憶」をさらけ出すようなスケッチである必要があるため、まっさらな紙が適している。ストレス

なく描けるという点において、筆者は濃い目の鉛筆を推奨する。描いている最中の微細な違和感や気づきに敏感になれなければ、この実践は意味がなくなってしまうと言っても過言ではない。

C-3:スケッチ中の手もとの映像を撮影する。これは後から振り返りを行うためである。スケッチ中は余計な意識を割かないことが重要である。記録を残しておこうという意識も本実践の阻害要因になりかねないため、記録の都合と意識の問題の面からも、振り返りの媒体としては映像の撮影が最も適すると考えられる。

C-4:写真を模写することが目的ではない。「からだの記憶」をアウトプットするためには、思いきりのよさが必要である。写真を手がかりにしつつ、多くはからだに委ねてダイナミックに描くと、暗黙的な「からだの記憶」が、スケッチに表れてくる。

C-5:ただし、いつまでも「からだの記憶」に頼っているだけでは、“そのひとらしさ”を意識上に持ち上げられない。スケッチをしている最中や、一旦手を止めてスケッチを俯瞰する時、ふと浮かんできた言葉はすぐに余白に書き留めておく。言葉をひねり出すのではなく、パッと浮かんだ言葉をメモする感覚である。

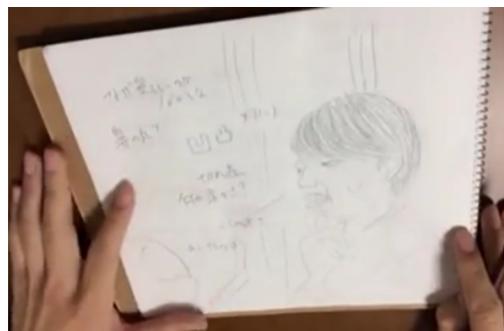


図2: 段階Cにおけるスケッチ

スケッチ中には「予期せぬ発見」と「再解釈」が起こりやすい[諏訪 99]。「予期せぬ発見」とは、スケッチすることで紙面上に付与されるビジュアルな要素が、すでに描かれた要素との間の位置関係や形、大きさなどの属性の比較関係によって得られる発見である。「再解釈」は、ビジュアルな要素から連想される非ビジュアルなイメージが一通りでないことにより、ある程度の時間においてその要素を目にした時に生まれる解釈である。ともに、スケッチによってビジュアルな要素が眼前に立ち現れることが重要である。本研究におけるスケッチ中にも、これらの効果は度々見られた。その具体例は、5章にて詳細に紹介することとする。

C-6:スケッチの数が多ければ3.4以降の実践においても手がかりが増えると考えられるが、筆者は1人あたり4枚のスケッチを描いた。これは写真撮影の際の、4回以上異なるシチュエーションでの撮影が必要というのと同様の理由からである。

### 3.4 D:スケッチを振り返り言葉同士をつなぐ

スケッチを振り返り、言葉同士をつなぐ作業を行う(図3)。

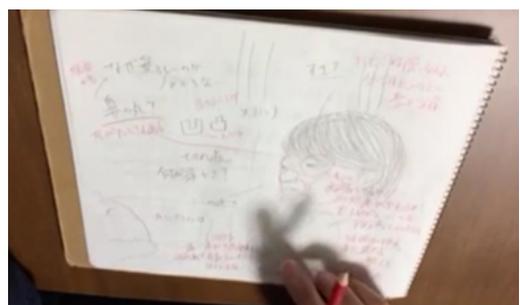


図3: 段階Dにおけるスケッチ

D-1:スケッチ時と同様、振り返り用に手もとの映像を撮影する。

D-2:スケッチをしてから振り返りまでは 3~7 日ほど間を空けた方がよい。単にスケッチした当時のことを思い出すだけではなく、ある程度記憶の結びつきを弱め、さらなる問いを立てるためである。時間をかけてスケッチ時の意図や記憶の結びつきを弱めることで、「予期せぬ発見」や「再解釈」を促す効果も見込める。

D-3:赤鉛筆を用いてさらに言葉を書き加える。スケッチとともに並んだ言葉をざっと見返し、なぜその言葉が出てきたのか、本当にその言葉でいいのか、その言葉で言いたかったことをよりうまく表現できる言葉はないかというように、自ら問いを立て、その都度出てきた言葉を空いたスペースに書く。

D-4:言葉の連想だけで問いを立てようとしても、深い問いには至らないことが多い。言葉だけではなく、スケッチに表れる手がかりがあれば、1 枚目と 4 枚目に各々書いたことがつながるといように、スケッチ過程全体を通して見返すことが重要である。局所に集中する、俯瞰する、スケッチと言葉、言葉同士に着眼するなど、様々な視点を意識的に持つ。

D-5:さらにこの段階において特徴的なのが、二次元平面のスケッチには直接表れない触覚や聴覚、動きなどといった、時間経過を伴う感覚も想起されるという点である。これは本研究で新たに見出されたスケッチの効果である。スケッチと向き合っているうちに、まるで自分がその相手と対面しているかのように感じられることがある。自ら撮影した写真であることが大きな要因であろう。写真撮影の際、自分と相手は同じ空間内で、時間を共有している。ゆえに、視覚的に見える相手の特徴だけでなく、お互いに言葉を交わしたり、動作によって何かを伝えたりというように、視覚以外の知覚を使ったやりとりが起きている。スケッチとじっくり向き合ううちに、音声や動作などに関する「からだの記憶」が喚起され、スケッチに表れないながらも擬似的に知覚することが可能になっているのではないだろうか。

### 3.5 E:断片的な“そのひとらしさ”をもとに対象の人と対話する

この時点では、スケッチの振り返りを行ったことにより、“そのひとらしさ”を表現する語彙が増えてきているものの、まだ各々の言葉は独立して結びついていないことが多い。本研究では、ここで対象者と“そのひとらしさ”について語り合う機会を設ける。

E-1:D までに作成したスケッチを見ながら、断片的な“そのひとらしさ”に関する言葉を用いて、「自分はこんなふうに“あなたらしさ”を感じている」と伝えてみる。相手には、こちらが断片的に示した“そのひとらしさ”に関する気づきを聞いてどう感じたかを語ってもらう。あまり決めつけないゆるさを持つことが重要である。身近なエピソードや、全く関係ないかもしれない話かと始めてみると、思ってもみなかった気づきを得られるかもしれない。

E-2:対話中、“そのひとらしさ”に関する語彙として重要だと感じた言葉は、スケッチブックの空いたスペースにその都度メモを取る。これまでの書き込みと混同せぬよう、青鉛筆を用いる。

例えばある被験者は、筆者が「よく人に何かを教えているからか、同じ目線に立つ姿勢がとても印象的」と伝えた時、「教わってきた先生の影響」や「ワークショップやキャンプを通じて、児童に自然のことを教えてきた」という経験を語ってくれた。また別の被験者は、筆者が「視点がどこか一点に定まっておらず、面で捉えている感じがする」という気づきを伝えた時、「好き嫌いとか、良い悪いという価値判断をせずに見ている」と、筆者の気づきをさらに促すような見解を述べてくれた。

E-3:他にも「本当にそうなのか」という違和感であったり、あるいは筆者の問いから派生した問いが生まれ、対話中にはいくつもの言葉が出てくる。これらの言葉は、改めて“そのひとらし

さ”を考える手がかりになりうる。また、これまで得てきた語彙を用いて相手に伝えようとするため、言葉同士の関係性を考える必要が生じ、自分の中でも違和感や矛盾を感じるが生じる。

### 3.6 F:再びスケッチと向き合い言葉をつないで気づきや仮説を生む

E の対話を基に改めてスケッチを観察し、気づきを記述する。

F-1:スケッチの用紙よりも一回り大きな用紙(画用紙やスケッチブックなど)を用意し、その中央にスケッチを貼る。スケッチの周囲に余白がある状態になる(図 4)。

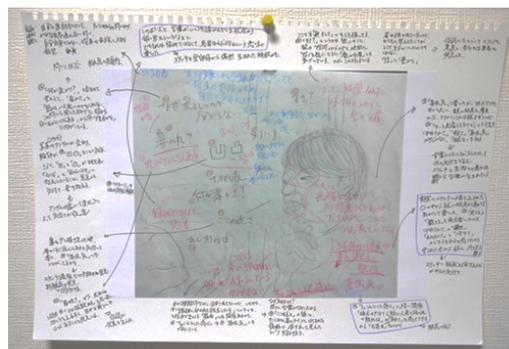


図 4: 段階 F におけるスケッチ

F-2:紙面上に散りばめられた複数の言葉同士、スケッチと言葉、対話の内容と言葉などの組み合わせの中に新たな解釈を見出す意識を持ちながら、振り返る。何か気づいたことがあれば、余白部分に黒のボールペンでその気づきを記述する。

F-3:気づいたきっかけを遡る際の手がかりとなるため、スケッチ時や振り返り時の映像を見返す際は、記述の順番に番号を振っておくとよい。映像を振り返ることのメリットは、たしかに記述した順番は可視化されるものの、なぜその言葉を書くに至ったかが明示的でない点にある。スケッチ中は特に、意識的な言語化を行っていないため、暗黙的な事柄が多い。ただ自分の思考をたどるための記録としてではなく、振り返るうちに「こことこのつながりに気づいてこの言葉を書いたのかもしれない」と、新たな解釈を得ることもできる。映像を用いた振り返りは有効である。

F-4:重要な気づきや仮説であると感ずる記述は、紫の色鉛筆で囲ってわかりやすいようにしておく。

F-5:この時の記述はこれまで出てきた言葉に比べて長く連なることが多いはずである。複数の関係性を記述しようとすれば、自然と記述は長くなるためである。例えば、「やさしさ」や「やわらかさ」を感じるものの、「怖さ」も感じるという時、それはなぜだろうという問いが立つ。その問いをもとにスケッチを見返すと、口もとの部分にその「怖さ」がにじみ出ていることに気づく。そこで筆者は、笑うことによって「やさしさ」や「やわらかさ」が最大値に近づいていく一方で、大きく開いた口から見える「歯ぐき」が「怖さ」を感じさせる正体なのだという気づきを得た。こうした気づきに関して、少し長めの言語化をすることによって、手がかり同士のつながりを明確にすることができる。

### 3.7 G:重要な気づきや仮説を提示しながら対象の人と対話する

F で作成したシート(図 4)をもとに、再び相手と“そのひとらしさ”について語り合う時間を設ける。

G-1:シートにはすでにいくつかの重要な気づきや仮説が記されているため、その重要な記述をメインに周囲の記述も見せながら、ともに“そのひとらしさ”に関して語り合う。

G-2:複数のシートにまたがった新たな解釈を得る可能性も考えられるため、全てのシートを広げて一覧できるような環境で実践を行うことが望まれる。Eでの語りと異なる点は、これまでの実践を踏まえた“そのひとらしさ”の言語化がかなり進んでいることである。前回の語りでは、こちらの気づきをバラバラなまま示し、相手の語りを引き出し、その言葉を手がかりとして問いを立てることが目的であった。今回の語りでは、二度目の振り返りを経て得た、いくつかの重要な気づきや仮説を相手に対して提示することで、お互いにより深く語り合うことを目的としている。

G-3:語り合う中で生まれる気づきをリアルタイムに生かせるといい。もしこちらがありきたりでない“そのひとらしさ”を言語化できていけば、応じる相手の言葉もありきたりにはならない。それを取り上げ、次の話題を広げ、さらに派生して…というように、気づきや仮説を披露するだけでなく、対話に広がりを持たせる。

### 3.8 H:“そのひとらしさ”を綴る

最後に、これまでの7段階の実践を経て感じられる“そのひとらしさ”を綴る。長文を書くことが求められるわけではない。相手のいくつかの「分人」に関して書くような意識を持つとよいであろう。どんな時、どんな状況で生まれる“そのひとらしさ”に自分は気づいたのか。全ての実践で得た手がかりを総動員して、自らの「からだの記憶」を呼び覚まし、“そのひとらしさ”の言語化に努める。次章では、実際に筆者らが綴った記述を紹介する。

## 4. 成果として綴られた記述

分人としての“そのひとらしさ”を1人あたり4つの文章で綴った。本章では、Fの4つの分人を綴った文章を紹介する。

### 4.1 Fの分人1:じっくり、自分の色で相手を染める

Fは相手との関係性のつくり方がうまい。初対面の人に対していきなり距離をつめたりすることはせず、ただその場に佇んで、じっくりと自分の色で相手を染めていく感じ。紅茶のパックから、じんわりと紅茶のエキスが湯に染みわたっていくような感覚。それはある意味、自分の色をよく知りつつ、その色にちょっとした誇りを持っているからなのかもしれない。でなければ、焦って一気に相手に近づこうとしてしまったり、逆に「自分は自分だ！揺るがないぞ」と意固地になって、はねのけてしまったりもするだろう。Fの場合、「まあそのうちこの色の良さも分かってくれるでしょ」というような軽さを感じさせる。実際、人と人との関わり合いなんてそんなもんだし、無理しなくたって交わる色は交わる。なのに多くの人は、そこに余計な力を割いたり、難しく考えすぎて嫌気がさしてしまう。力の使いどころを心得ているから、周りに比べて常に余裕を感じるのだろうか。

### 4.2 Fの分人2:省エネで人生を楽しむ

Fの持っている色はどんな色かという、少し緑の混ざった茶色のような感じがする。軽さは、少し混ざった若葉のような緑色から感じるのだろうか。派手さはなく、落ち着いて見えるけれど、こちらのからだについてしまうとなかなか離れない。嫌味はないけれど、離れない。その感じは、言葉にもけっこう出ている気がする。「力強い」とか、「奇跡起きてる」とか、「たぎる」とか。頻繁に口にするから、いつの間にかその場の流行語が生まれてたりする。言葉自体は突飛なネタでも何でもなくて、もともと誰でも知ってるような日本語で、地に足ついてるから、なんかずるいんだよね。当たり前の中にある、ちょっと変な違和感みたいなものを取り上げて、自分で色づけして使える。だからみんなその言葉を思わず使っちゃうんだけど、頑張って面白いことしようとする人からすると、ちょっとうらやましくもあり、ずるく感じちゃうところもあ

るのは、それが原因だなきっと。古びたエアコンが、省エネエアコンにひがむような気持ち。俺だってもっと、効率よく自分の風を行き渡らせたいよ。

### 4.3 Fの分人3:アンパンマンでありながら、如来の目を持つ

柔らかさの正体が、ちょっとわかったような気がする。Fには丸がたくさんあるんだ。顔の輪郭の丸、頬の丸、鼻の丸。ほうれい線に囲まれた口もとも丸だし、目の丸だって際立ってる。ずっと眺めていると、いくつかの丸に囲まれた顔がアンパンマンのように見えてきた。自分はヨゴレ役には回らずに、スマートに問題を解決していく。はからずも、その場の主役になっちゃう力があるんだなあ。けれど、ただ柔らかいだけじゃないのは、きっと如来のような目のおかげなんだろうと思う。丸に囲まれた中から、細く鋭い視線はいつも世界に向けられている。目単体では冷ややかに見られがちだろうけど、周りを丸が取り囲んでいるから、その鋭さは中和されてまろやかになっている。Fから感じるやわらかさと鋭さの対比は、こんなところにも表れていたんだなあ。

### 4.4 Fの分人4:下唇に希望が詰まっている

軽さといえば、Fのぼてつとした下唇には常に希望が詰まっています。その余裕感を感じさせる原因になっているのだと気づいた。やる事が溜まって大変な時にも、「終わったわ」と言いつつ、下唇は全然終わってない。なんでそう感じるかというと、舌を出したり、下唇を突き出したりする仕草って、「なんちゃって」とか「てへ」っていうような、ちょっとしたおちゃめさを感じさせるものだから。あとは眉毛もそう。よく動く眉毛が大事態に陥ってるかのごとく物語るけれど、それは偽り。身体の芯では何とも思っていないんだ。全部、下唇に出てしまっている。もちろん、無駄に感情の込もったようなその言い方も、茶番感を感じさせるのだけど。そうやってとりあえず外に出しておくことが、自分の頭の整理にもつながっている。人といる時の方が作業がはかどるって、一体どういうことだと思うが、きっとこの放ち方のおかげなのだろう。

## 5. まとめ

本稿では、“そのひとらしさ”とは何かを問い、その探究方法を提案した。ある人の分人としての“そのひとらしさ”は、その人が置かれている環境や相対する人によって、臨機応変に形を変える。二人称視点でのからだメタ認知実践により、“そのひとらしさ”を言語化できる可能性を示した。

## 参考文献

- [Goffman 59] Goffman, E.: *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday (1959)
- [平野 12] 平野啓一郎: 私とは何か ―「個人」から「分人」へ―, 講談社 (2012)
- [Holstein 95] Holstein, J.A. & Gubrium, J. F.: *The Active Interview*, Sage (1995)
- [伊藤 13] 伊藤毅志, 松原仁: 羽生善治氏の研究, 人工知能学会誌, Vol. 28, No.5, pp. 702-712 (2013)
- [諏訪 99] 諏訪正樹: ビジュアルな表現と認知プロセス, 可視化情報, Vol. 19, pp. 13-18 (1999)
- [諏訪 10] 諏訪正樹, 赤石智哉: 身体スキル探究というデザインの術, 認知科学, Vol. 17, No. 3, pp. 417-429, (2010)
- [諏訪 13] 諏訪正樹, 堀浩一, 中島秀之, 松尾豊, 松原仁, 大武美保子, 藤井晴行, 阿部明典: 一人称研究にまつわるQ&A, 人工知能学会誌, Vol. 28, No. 5, pp. 745-753 (2013)